

Q4 行事に参加するときは、どのようにすればよいのでしょうか。

(運動会、発表会、入園式、園外保育を中心に)

指導、支援のポイントとして、①本人の安全と参加意欲、②保護者の合意、③他の園児とのかかわり、④園内体制のとり方、の4点に留意する。

	入園式	運動会	発表会	園外保育
① 本人の安全と参加意欲	保護者がすぐ近くにいられるように配慮する。 その時の状態を尊重して、式場内の場所を変えるなどの配慮をする。	個人競技:競技の流れの中で参加していく。 団体競技:行動が続かないときは、すぐに対応できる位置での参加。	全体への参加にとらわれず部分的であっても集中して参加できるようにする。 数名で演じたり、台詞にこだわらない役割に配慮する。	歩行中は必ず手をつないで安全を確保する。 安全な場所に行ったときは、本人の興味を尊重し、受け入れる。
② 保護者の合意	保護者と保育者がお互いに理解したうえで、本人に付き添う。保護者に声をかけて、一緒に場所を移る。	事前にこれまでの取り組み状況を伝える。本人にストレスのかからない範囲を説明する。	事前に、本人に無理のかからない参加への理解を得る。学びの姿がわかるように、見方を伝える。	緊急事態に備えて、必ず連絡が取れるようにする。事前に目的地の状況について知らせる。同行も可能。
③ 他の園児とのかかわり	肩や背中にそっと、手をおく。一人ひとりに安心感をもたせていくように声をかける。	参加の違いを受け入れる。クラスの仲間として、温かな理解ができるようにする。	練習のときも、保育者が本人に対して大切に接していることが伝わるようにする。	学級の仲間としての気遣いや気づきをする。一緒に楽しみながら、安全に行動する。
④ 園内体制のとり方	初めての環境で不安定であったり、興奮や緊張がみられるので、短時間での進行を配慮する。	担任以外の保育者も、日常の練習から目を配るような体制をつくっておく。	担任以外に本人に付き添える人を明確にしておく。とっさの事態に動ける保育者が付き添うことが必要である。	園内の共通理解。実地踏査し、まぎれやすい場所や落ち着きやすい場所の把握。緊急事態の対応体制を練っておく。

(出所) 無藤隆 神長美津子 柘植雅義 河村久 編『幼児期におけるLD・ADHD・高機能自閉症等の指導「気になる子」の保育と就学支援』東洋館出版社 2005 pp48-49 から抜粋し表にした。

Q5 個別の指導計画は、どのような手順で作成すればよいのでしょうか。

1 個別の指導計画とは

個々の幼児の発達や発達上の課題を明らかにし、指導の見通しや方向性を探るために作成する。指導目標、内容、環境や援助を盛り込んだ指導計画である。

2 作成する際の手順

- ① 幼児の発達の状況、課題を把握
- ↓
- ② 指導計画に盛り込む事項を検討
- ↓
- ③ 年間指導計画作成
- ④ 学期ごとに指導計画の作成
- ↓
- ⑤ 園内研修・会議で報告（職員の共通理解を図り、連絡・支援体制をつくる）
- ↓
- ⑥ 実践
- ↓
- ⑦ 評価（担任や担当者、作成委員会で評価）
- ↓
- ⑧ 全員で共通理解しながら指導計画の改善

3 個別の指導計画の効果

- (1) 発達の課題が明確になる
— 教材づくりや指導方法がしやすくなる。
- (2) 多面的な見方と評価ができる。
- (3) 見通しをもった指導ができる。
- (4) 保護者に幼児の発達を伝えやすくなる。
- (5) 家庭と園とで同じ姿勢で教育が進められるようになる。

（第VI部資料編 P39～43を参照）



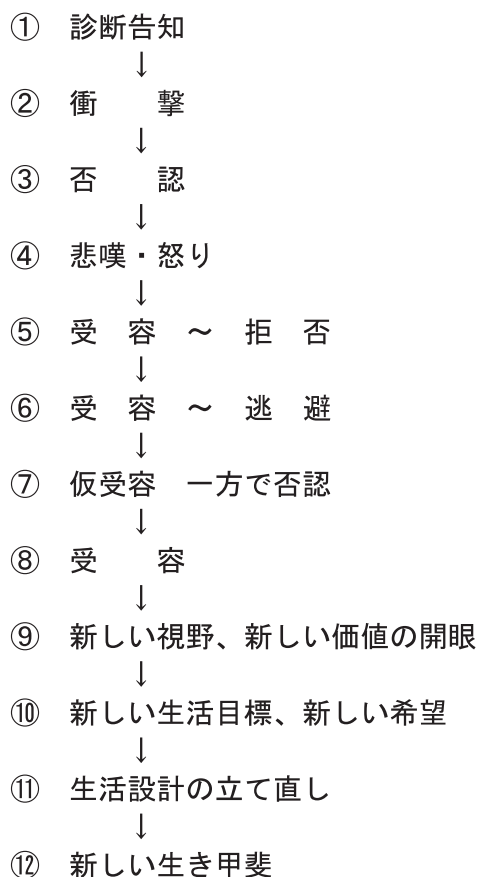
Q6 保護者の気持ちをどう理解していけばよいのでしょうか。

ポイント 「しんどいよね」 共感していく気持ち、寄り添っていく姿勢

人は生きるにあたって、直面せざるを得ない苦しみや悲しみ、不安や迷いといった諸々の困難を乗り越えていかなければならない。まして障害のある子どもの親は子どもの障害を受け入れることは相当難しい。

障害の多様化や複雑化に伴い、援助が必要な子どもやその家族に対して、きめ細かい相談体制の整備等、それぞれの家庭事情に応じた支援が求められる。

障害のある子どもの親が、どのような過程を経て子どもの障害を受け入れていくのか、心の変容は次のとおりである。



(出所) 保育士問題検討委員会「保育士試験の要点と問題」大阪教育図書株式会社 2002年 p. 450

①の診断告知されることで、子どもに障害のあるという事実を知らされる。

②③は、そのことで目の前が真っ暗になり、親自身の不幸、子どもが不幸、そして、家族が不幸と嘆き、絶望感に陥りながらも、いろんな病院を回っていく。

④⑤⑥は、自分自身への怒りや社会への怒り、神へのうらみ、医療への不信など、罪悪感や目的のない祈り、親子心中など精神疲労を起こす傾向がある。

⑦⑧は、専門の病院や相談所に相談指導を受けたり、又は、消極的ではあるが親同士のつながりができてきたりする。

⑨は、専門的指導を積極的に取り入れ、障害児問題について積極的に関心を持つようになり、子どもを見る目が変わってくる。

⑩⑪は、親の会などに積極的に参加し、障害児問題について積極的に意見を述べ、他の親たちを援護できるようになる。

以上のような子どもの障害に対する受容への過程は、長期にわたって行きつ戻りつ繰り返される。このような心理的変容を経る親の立場や状況を保育者がどれだけ受容できるかがキーポイントになる。

Q7 保護者との連携はどのようにすればよいのでしょうか。

1 家族への援助は、障害がある、ないにかかわらず人間関係の基本となる信頼関係が核となる。

信頼関係ができると、親自身が障害のある子どものことを話し、また、話すことで親も気持ちが整理でき負担が軽くなっていく。障害のある子どもの保育は、養育者である母親とのかかわりが主となることに気をつけるべきである。

(1) 日常的に話し合う

家族の思いを気持ちの上で受容する。また、子どものよさを見つけながら話し合い、親に安心感を持たせる。例えば、保育者は集団の中での子どもの遊び、食事、排せつ、体調、友達関係など子どもの発達状況を伝え、そうしたことを受け止める親自身の変化にも気づかせたい。

(2) 園と家庭が共通の指導目標を持つ。

子どもの発達が促されるように、家庭と園がともに育ちの共通の目標を設定する。つまり、具体的な「ねらい」をもって評価することも次へのステップにつながるので援助のありかたとして大切である。

(3) 情報交換として電話や連絡帳の活用をする。

記録することで、指導方法が明確化される。有用な記録にするためには、子どものできたことを書くとよい。また、記録をつけながら問題が整理され、子どもの発達や変化を振り返ることにつながる。

(4) 「園生活表」「家庭生活表」を作成する。

子どもの生活の全体像をお互いに把握できるように、幼稚園や保育園では「園生活表」を、家庭では「家庭生活表」を作成して共通理解を図る。

2 ほかに、地域の医師や保健師、児童福祉司、ケースワーカーなどの専門家の意見や診断が必要とされる場合もある。そして、時間的な余裕があれば、学習会や勉強会を開くことも支援につながる。

3 障害のある子どもの親が、子どもや園にどのような願いを持っているのかを理解し、基本的に相手を受け入れ、可能な限り支える。親を指導したり、家庭の責任を追及したりするのではなく、保育者が「一緒に子どものことを考えていきましょう」と、親や家族の心の支えになるような協力体制を整えていきたい。否定的ではなく、肯定的にとらえる機会を提供できるようにしていきたい。

待望の子どもに障害があると分かったとき、不安や疑問が頭の中を走り抜け、絶望を感じ、どうすることもできない深い悲しみの淵に沈む。「天国の特別な子ども」の詩に出会うことで、どれだけの障害のある子どもをもつ親が勇気づけられたことか。

—天国の特別な子ども—

エドナ・マシミラ (大江裕子訳)

会議が開かれました。

地球からはるか遠くで

「また次の赤ちゃん誕生の時間ですよ」

天においでになる神様に向って 天使たちは言いました。

この子は特別な赤ちゃんでたくさんの愛情が必要でしょう。

この子の成長はとてもゆっくりに見えるかもしれません。

もしかして 一人前になれないかもしれません。

だから この子は下界で会う人々に

とくに気をつけてもらわなければならないのです。

もしかして この子の思うことは

なかなか分かってもらえないかもしれません。

何をやっても うまくいかないかもしれません。

ですから私たちは この子がどこに生まれるか

注意深く選ばなければならないのです。

この子の生涯がしあわせなものとなるように

どうぞ神様

この子のためにすばらしい両親をさがしてあげてください。

神様のために特別な任務をひきうけてくれるような両親を。

その二人は すぐに気がつかないかもしれません。

彼ら二人が自分たちに求められる特別な役割を。

けれども 天から授けられたこの子によって

ますます強い信仰を

より豊かに愛をいただくようになることでしょう。

やがて二人は 自分たちに与えられた特別な

神の思し召しをさとるようになるでしょう。

神から送られたこの子を育てることによって。

柔和でおだやかな二人の尊い授かりものこそ

天から授かった特別な子どもなのです。

(出所) 「先天異常の医学—遺伝病・胎児異常の理解のために—」 木田盈四郎 著 中公新書